校友時報

昭和62年7月21日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 ㈱大勝堂印刷

第28回能高祭

燃えた!!高塙の夏

意気込み見せた新企画

テレフォンカード初お目見え

第二十八回能高祭が「Mob～鎮圧不可能」をテーマに、前夜祭を含めた六月二十六日から三日間に渡って開催された。

今年は新しい企画が目を引き、事前に投票し、前夜祭発表となった、「Miss・Mr、能高コンテスト」、二十七日体育館で行われた「島崎杯能高オリンピック」、予約から大好評となった「テレフォンカード発売」があり、上々の評判をよんでいた。また、昨年は後夜祭が雨にたたられてしまったが、今年の能高祭は準備期間も含め、天候に恵まれ、フィナーレの後夜祭も夕日が沈む中、それぞれ思いっきりエンジョイしている姿が見られた。特に、高校生活最後の能高祭を迎えた三年生の活躍する姿が、ひときわ目立っていた。

みんな!!踊ろうぜい

なお各部門の審査の結果は次の通りである。

▽総合の部

優勝	三G
準優勝	三F
三位	三D

▽HRデコの部

最優秀賞	三F	oh!祭り～三Fの神社に染まれ君の青春
優秀賞	三G	夜店
優良賞	三E	ちょっとキザだけど ボンジュール・ビデオクイズ
新人賞	一F	驚異の六房

▽新聞の部

最優秀賞	三F	柴苑
優秀賞	三A	黎明
	三B	碧漪
佳作	三C	薄雪草
	三D	勇往
	二C	松陵
新人賞	一F	蝉時雨

▽前夜祭のど自慢の部

最優秀賞	三D	「22才の別れ」
優秀賞	三G	「ツッパリハイスクールロックンロール」
優良賞	三E	「NAI-NAI16」
特別賞	二B	「ギャランドゥ」

▽仮装の部

最優秀賞	三G	「かるがも」
優秀賞	三A	「チャップリン小劇場」
優良賞	三C	「燃えよロシアンダンサーズ」
特別賞	三D	「北斗の最後」
	二F	「校長先生と火の用心しよう」

季節の窓

夏霧にぬれてつめたし白き花　乙二

峠にはひんやりと霧が流れ、夏草が冷たくぬれている。その中に点々と咲く白い花が、霧の底から浮かんではまた消える。

部説

能高生気質

〝やるときはやる〟

本校の最大の行事である能高祭も無事終わり、あの爆発的な熱狂が嘘のように、いつもと変わらぬ学校生活が営まれているかと思われる今日この頃であるが、まだ能高祭の興奮がさめていない生徒も多いのではないだろうか。

多くの能高生は初めての能高祭のときに自分が能高生であることを体で感じ、心から誇りに思うという。四月に対面式があったが、このときの在校生有志による歓迎で、〝やるときはやる!これが能高生だ!!〟という言葉があった。これは今年に限らず能高生の間でいわれてきた言葉である。入学してから能高祭前までは勉強が大変で、真面目でかたいという、いかにも進学校から連想されやすい印象を持ちがちである。実際、本校では入学式ですでに進学の話が出される。ゆえにそういう印象を持つのはもっともである。ところが能高祭でそれまでは思いもかけなかった盛り上がりと団結力を見る。初めて体験する者にとっては驚異であり、すばらしい感動である。その時にこそ〝やるときはやる〟という言葉を思い出す。つまり、勉強する時はするし、みんなで協力するときは協力する。言葉をかえるとやるべきことはきちんとやるということであり、あたり前のことではあるがその姿を見て感動し、自分もその一員であることを誇りに思うのである。まさに能高生のあるべき姿であろう。

ところで、三無主義という言葉がいわれているが、これはいわゆる今の若者に多いとされる、無気力、無関心、無責任な人をさす言葉である。本校にもその傾向があるように思う。最近本校では世間に非難されるような反社会的な行動をとる人がいるようである。これは周りの人のことを考えず、自分勝手で無責任なためにおこるものと思われる。また、失敗して自分に責任がかぶさるのをおそれて学校行事に対しても誰かがやるであろうという無気力で無関心な人もいないとはいえない。これらのことは、長い間に築き上げられた能高生に対する評価にあまえている面も多分にあるためともいわれている。

今年も三年生を主体にすばらしい能高祭になった。能高祭にかける情熱はすばらしいものがある。その情熱を能高祭だけで終わらせてはならない。〝やるときはやる〟という言葉のもと、私達が能高生であることに誇りを持ち続けていけるよう努力しようではないか。

澤野氏を招いて

美しい日本語とは

去る六月十七日（水）、本校で作家の澤野久雄先生をお招きしての文化講演会が行われた。

先生の「美しい日本語」と題された講演の内容は、主に先生が外国へ行かれた時の言葉にまつわる体験談と日本語のあり方についてであったが、日本語の使い方への疑問点の話で、最近は言葉を変に組み立てたりやたら外国語を使ったりして日本語をなおざりにする傾向が見られることを挙げられ、こんな話をしてくださった。先生がコーヒーを注文された時のことで「コーヒーをください。」と先生が言われると「ホットですね。」とウェイトレス。「ええ熱いのを。」と言われると、また「ホット」と念を押され、熱いものを注文されはしたが、まさかコーラなんかの熱いのは来ないだろうな、と気を揉まれたというのである。ここで生徒は一斉に吹き出したが「外国ではそんな飲み物はないのに、どうして熱いコーヒーと言わないのだろう。」と言われた。外国人は自国語をとても大切にすることに気付かれたそうだが、外国語に比べて表現力も豊かで美しい日本語をないがしろにすることを残念がられ、「最も美しい日本語を使う川端康成さんの本を一冊でも読んでほしい。」と言われた。

なおこの講演会は、昭和四十一年に集英社が実施、五十一年からは財団法人一ツ橋文芸教育振興会が継承し、本校では今回で四度目の開催となった。

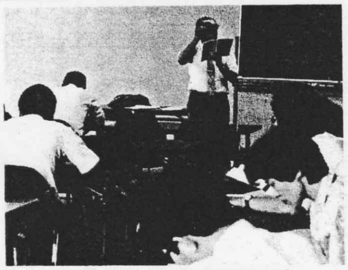
秋大説明会

学部の特色を学ぶ

七月三日本校において、進学希望の三年生を対象とした秋田大学説明会が行われた。

この会は、受験生に秋田大学に対する認識を深めてもらおうと毎年この時期に開かれるものである。今回は秋田大学教育学部からは、英語第一研究室の小松元也教授、鉱山学部からは、電子工学科の成田裕一教授がそれぞれ来校された。

この日、教育学部は視聴覚室、鉱山学部は会議室で、それぞれ説明を行ったが、教育学部は北高生数名を含め、約九十名、鉱山学部は約四十名と、前年度を大幅に上回る生徒が参加しており、今年の三年生の受験に対する関心の高さを伺わせた。教育学部の小松教授は、中学校課程をはじめとする各課程ごとの勉強内容、就職先などを説明され、特に就職に関しては教育学部卒業だからといって、必ずしも先生になると決まっているわけではなく、実際に、地元の民間企業から毎年多数の求人があり民間企業への就職者も多いこと、反面、一、二年がまんしても、教職を目指す生徒もいることなど説明された。さらに専門である英語の受験勉強の仕方を黒板に問題例を書くなどして丁寧に教えて下さり、熱心にメモをとっている生徒の姿がみられた。


鉱山学部の説明（成田教授）

一方、鉱山学部の成田教授は、授業についていくことが難しく、毎年多くの留年組が出ること、その半面、卒業時には、一人に対し数社から求人があり、職場が選べるという好状況であることなどを説明して下さり、男子生徒とともに、数名の女子生徒も熱心に話に耳を傾ける姿が見られた。わずか一時間ほどの短かい間ではあったが、中味の濃い説明会であった。

受験生に喝!!

――進学講習会――

先ごろ二、三年生を対象に、学年別に進学講演会が本校体育館で行われた。三年生は五月十二日に代々木ゼミナールの小坂敏雄氏、二年生は六月十六日に旺文社の中島美幸氏を迎えて講演会が開かれた。それぞれ皆、自分に関係のある話だったので、メモをとるなど真剣に講演に耳を傾けていた。

小坂氏は三年生に、「六十二年度の入試結果をふまえて」「六十三年度の大学入試にどのように対応したらよいか」を中心に、「AとBのダブル受験が可能になったために、西日本の生徒が東日本に流れこんできたので、西日本に対抗するためには相当頑張って勉強しなければならない。」などと話された。一方、中島氏は二年生に、「二点の重み」「学習方法の基礎」など5つの項目について述べられた。なかでも「学習方法の基礎」では、「①生活のリズムを整える②学習の時間表をつくる③まず机の前にすわる④教科書を一〇〇%活用する⑤テスト問題は必ず復習する」ということを話され、その日から実行できることだけに皆、興味深げに聴いていた。

以上のアドバイスを大いに生かして行きたいものである。

熱演

春季演劇発表会

六月六日（土）、二ツ井町福祉会館で春季演劇発表会が行われた。出場校と上演した劇は、能代北高校（はい、さいなら）、二ツ井高校（しんでれら・げえむ）、能代工業高校（窓口）、能代商業高校（旋律の終りに）、本校（あしたは天気）であった。

本校の「あしたは天気」は、高三の関口晴子が、周りがどんどん進路を決めているなかで自分のやるべき事がわからず悩んでいたが暖かく彼女を見守る祖母と、小さな測候所の所長を務める父の一生懸命な生き方とに励まされ、大学進学を決心する話であった。

顧問の武田幹夫先生は「照明や装置に多少の課題が残る。」と言われたものの、演出面には随所に工夫が見られ、講評の際にも誉められていた。また先生は「全体的にはよくまとまっており、特に台本の読解は正しかった。」と続けられた。「演技に迫力があった。」「感動した。」との声も聞かれ、秋への確かな手応えを得たようである。

出来事

講話

五月二十六日五校時、能代署交通課の五十嵐孝明警部補を迎え、毎年恒例の交通講話が行われた。講話の中で五十嵐氏は、交通事故が起きた場合について、刑事上では被害者となる自転車側が、二人乗りや無灯、傘さし運転など、道路交通法に違反したため、民事上で加害者となり、被害者側に多額の賠償金を支払わねばならない場合もあることを、いくつかの例を挙げて力説された。

献血

六月十八日、献血車が来校し、百二十名（二年生七十四名、三年生四十六名、職員二名）が献血した。今回は昨年十月の九十七名を上回ってはいる。しかし数年前には、百七十名を越えていたことに比べると、最近はやや減少傾向にあるようだ。この献血は、一〇〇パーセント人々の善意の協力によるものなので、強い関心と深い理解が望まれる。

漁点

▼冬が過ぎて暖かな春の訪れとともに、桜の花が咲き始めた中をピカピカのランドセルを背負ったかわいらしい一年生が、親に付き添われて入学式へ向かう。『入学式』と言われて日本人が思い浮かべる光景は、大体こんなものだろう。▼先日行われた臨時教育審議会の総会では、『九月入学制への移行』を大筋で認めることを発表した。欧米諸国で採用されているこの九月入学制だが、なぜ今頃日本で？と思う人も少なくないことだろう。▼日本でこの九月入学制を採用した場合、一体どんなメリットがあるのだろうか。▼九月入学とすると、約四十日間の長い夏休みが、学年のかわる準備期間となり、受験シーズンも寒い季節から穏やかな季節へと移ることになる。また海外へ留学するにしても、非常に楽になるであろう。▼しかし、入学時期を九月に移行するには、相当の額の経費が必要とされ、また様々な混乱が起こることも予想される。それに学校以外、つまり国や地方自治体などでの予算その他は、そのまま四月から動くというのではどうしても、国にまとまりが感じられなくなりそうだ。▼終戦直後、アメリカの占領下にあった日本には、豊かな欧米諸国に対するあこがれというものがあった。そして、それらの国から入ってくる様々な文化に皆、注目し、真似したがった。この外国へのあこがれはそのまま、現在の我々の中に多少なりとも存在し続けているようである。▼確かに、諸外国の優れた面をどんどん吸収して、自国の向上に努める分には言うことはない。しかし、だからといって自国の文化、慣習などを捨ててまで外国に右ならえするのは、どこかおかしくはないだろうか。▼九月入学制が具体化されてくるには、まだ時間がかかりそうだが、たとえ採用されたにしろ、何かにつけて国際化が叫ばれている今、日本における真の国際化の意味を考えてみてはどうだろうか。